

Borsalino



フランス映画界きっての2大スターが
初めて顔を揃えた
本格ギャング映画の決定版!

■イーストマンカラー

ボルサリン



ジャン=ポール・ベルモンド/アラン・ドロン 共演

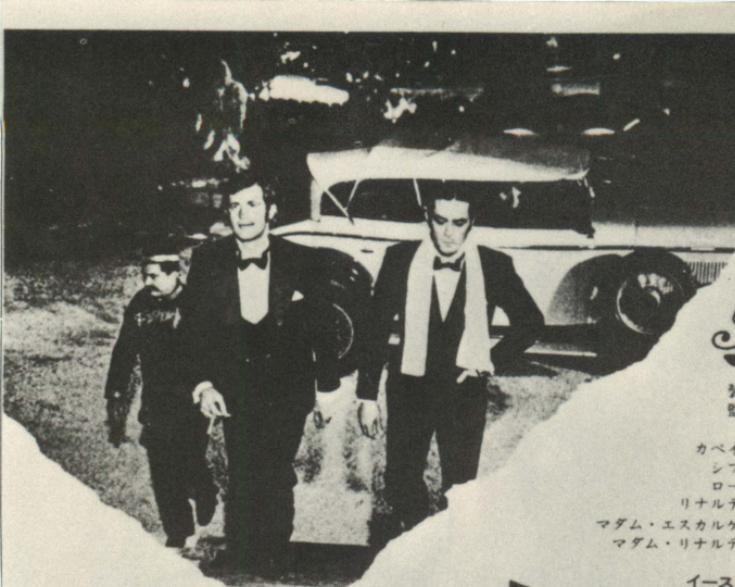
近日ロードショー

新宿プラザ劇場

新宿コマ劇場隣り (200) 9141-3



パラマウント映画



Borsalino

製作 ■ ビエール・カロ
監督 ■ ジャック・ドレー

カペイヤ ■ ジャン・ポール・ベルモンド
シフル ■ アラン・ドロン
ローラ ■ カトリーヌ・ルヴエル
リナルディ ■ ミシェル・ブーケ
マダム・エスカルケル ■ フランソワーズ・クリストファ
マダム・リナルディ ■ コリヌ・マルシャン

イーストマンカラー

ボルサリーノ

■「ボルサリーノ」について

映画題名で帽子の名前が使われるのは、めずらしいことイタリア製の有名な帽子の名称で世界の人々に広く愛用されている。

特に一九三〇年代のマルセーユは犯罪者たちの憧れの都であり、悪の温床となっていた。残酷なあまりない暴力が横行、ギャング同志の縄張り争いやあらゆる種類の密輸が日常茶飯事的に行われ、マルセーユの有名盛り場には白昼堂々と強盗が闊歩していた。

この映画は、そういう時代のマルセーユにとび込み、町を支配しようとした二人の男の友情を描いた物語。二人は若く、ライバルで、しかも無二の親友であった。

この二人はカペイヤ（ジャン・ポール・ベルモンド）とシフル（アラン・ドロン）。当時の言葉で「悪いヤツ」と呼ばれていただけあって悪事なら何でもやっていた。銃と暗殺には手を出さなかった。二人が会うきっかけとなったのはローラ（カトリーヌ・ルヴエル）という女。しかし彼女の存

▼物語

第二次世界大戦によって大きく変化する少し前、マルセーユは犯罪者たちの憧れの都であり、悪の温床となっていた。残酷なあまりない暴力が横行、ギャング同志の縄張り争いやあらゆる種類の密輸が日常茶飯事的に行われ、マルセーユの有名盛り場には白昼堂々と強盗が闊歩していた。

この映画は、そういう時代のマルセーユにとび込み、町を支配しようとした二人の男の友情を描いた物語。二人は若く、ライバルで、しかも無二の親友であった。

この二人はカペイヤ（ジャン・ポール・ベルモンド）とシフル（アラン・ドロン）。当時の言葉で「悪いヤツ」と呼ばれていただけあって悪事なら何でもやっていた。銃と暗殺には手を出さなかった。二人が会うきっかけとなったのはローラ（カトリーヌ・ルヴエル）という女。しかし彼女の存

▼解説



「ボルサリーノ」はスリラーという一般的なジャンルの中で、フランス的に変形された作品である。街の女から弁護士、ブルジョア、実業家に至るまでのあらゆる階層の人びとを生き生きと描いているのは、性格が両極端な二人の男の友情を中心に、暴力、破壊などをからませ、悲劇とコメディを渾然とさせた映画となっている。

単なる「悪いヤツ」の出世物語ではなく、三〇年代の巨大なナゾに包まれた都会マルセーユの再現でもある。

友情の基盤はお互いへの敬意と信頼だったが、同時に二人がもっていた気安さ、すこい度胸、創造的なヒラメキ、そして魅力なども彼ら結びつる役割を果たしていた。だから彼らはいつも二人組だった。片時も離れない仲の良い相棒だった。ある疑いが突然一人の伸をメチャメチャにしてしまいうまは……

カペイヤは世間々々に通じている寸法にピツタリの男だった。すべてのものに自分を合わせ、すべてのものを好きになった。女も、良い服も、ピカピカの車も、つまり彼が追っかけていた幸せも、指さされるもので、決してわけの分らないものではない。ただ彼はすべてを欲しがった。すぐ手に入れたが、だから幸せらしきものを見つけたら、彼はすべてを放つぱり出して、それに跳びつこうとするのだった。

シフルの性格は正反対。慎重な彼は二人の顔が少しづつ先れ、地位が上るたびに、カペイヤのたしめの役に回らなければならなかった。狙われた相手にはコワイ男だが、根が陽気で、人生を愛し楽しんでいったカペイヤにくらべてシフルは、人生以上の何かを求めているのかもしなかった。

平行線のままの二人だったが、過去や道徳がきらいで、すべてのものを合わせ呑み込むのがあるシフルにはどうしてもカペイヤが必要だった。彼の一部になっていたのだ。カペイヤと一緒にいてはじめて物ごとが始まり、終るのだった。

シフルの性格は正反対。慎重な彼は二人の顔が少しづつ先れ、地位が上るたびに、カペイヤのたしめの役に回らなければならなかった。狙われた相手にはコワイ男だが、根が陽気で、人生を愛し楽しんでいったカペイヤにくらべてシフルは、人生以上の何かを求めているのかもしなかった。

平行線のままの二人だったが、過去や道徳がきらいで、すべてのものを合わせ呑み込むのがあるシフルにはどうしてもカペイヤが必要だった。彼の

一部になっていたのだ。カペイヤと一緒にいてはじめて物ごとが始まり、終るのだった。

シフルの性格は正反対。慎重な彼は二人の顔が少しづつ先れ、地位が上るたびに、カペイヤのたしめの役に回らなければならなかった。狙われた相手にはコワイ男だが、根が陽気で、人生を愛し楽しんでいったカペイヤにくらべてシフルは、人生以上の何かを求めているのかもしなかった。

平行線のままの二人だったが、過去や道徳がきらいで、すべてのものを合わせ呑み込むのがあるシフルにはどうしてもカペイヤが必要だった。彼の